
青天の破片外伝

庵子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青天の破片外伝

【Nコード】

N0555K

【作者名】

庵子

【あらすじ】

妖怪。闇に住む者達。彼らはいつの時代も人間と隣り合わせに存在している。『ソラノカケラ青天の破片』のあのキャラクターのお話や、過去など本編では語られない物語をお届けします。

C r i m s o n F l o w : プ ロ ロ ー グ (前 書 き)

このお話のキャラクターは本編第45部より登場します。
あわせてよろしく願います。

Crimson Flow:プロローグ

のどかな田舎町にひっそりと佇むこの学校で事件が起こり始めたのは一週間前だった。

最初の被害者は陸上部の元エースだ。

元エースで今は問題児。

怪我が原因で陸上を辞め、今は不良少年と化している。

その男子生徒はある日校内で血まみれで倒れているのを発見された。

当初ただの喧嘩かと思われたが、それから次々に生徒が同じような状態で見つかる。

これまでに三人。

無数の切り傷を負って、一命は取り留めたものの入院中だ。

いずれも不良、問題児そんな風に位置づけされている生徒ばかりだった。

彼らの日頃の行いから見て事件性は薄く内輪もめか何かだと見られていた。

傷がどんな刃物よりも鋭いものでつけられたと判明するまでは。学校側は事件の真相解明と犯人を見つけだすためにやっきになった。

しかし手掛かりはつかめず、警察すら手をこまねいているのが現状だ。

様々な憶測が飛び交う中、生徒の間では人間ではない何かの仕業だという噂がまことしやかに囁かれたした。

事件は人の手を離れ、人の手に余るものとなりつつある。

人ならざる者の所業ならば尚更のこと。

事件の行方は闇の世界に住む者に委ねられようとしていた。

C r i m s o n F l o w : 1

こんな時に教育実習なんて…… タイミング悪すぎ。

学校中を包み込む重苦しい空気に耐えかねたように黒崎藍香はた
くろさきあいか
め息をもらした。

屋上である。

遠く青い空に鳶が優美な輪を描いて飛んでいる。

校内で起こっている事態とは裏腹にのどかな風景が眼下に広がっていた。

冬を目前にして空気は乾いて冷たい。

けれど職員室内のピリピリとした空気に比べれば寒い方がいくらかマシというものだ。

風が頬を撫で、藍香の亜麻色の髪とスカートを揺らした。

そろそろ、戻らないとなー。

時計に目をやって藍香はそんな事を思った。

もうすぐ昼休みが終わる。

職員室に戻ろうとしたその時、一人の男子生徒の後ろ姿が目にとまった。

この季節に屋上に来る者は珍しいが、誰でも登れるようになって
いるからそこに生徒がいてもおかしい事じゃない。

藍香が気にとめたのはその頭越しに煙が立ち上っているように見えたからだ。

おそらくは煙草の煙。

教師を指す者としては放っておくわけにいかない。

足音を忍ばせて藍香はその生徒に近付いた。

「君！タバコ止めなさい！！」

「やだなあ、煙草なんて吸ってませんよ」

慌てて振り返った男子生徒が携帯灰皿をポケットにしまうのを藍香は見逃さなかった。

「素直に残りを渡せば今回だけは見逃してあげるわ」

が、生徒はニコリと笑みを浮かべて吸っていないと繰り返すものだから、差し出した手がむなしい。

「君は確か今日転校してきた…」

朝、職員室で見かけた顔だった。

「かがみ架牙深です」

転校生のかがみりょうすけ架牙深龍介は如何にも優等生という風貌だ。

黒髪に黒ブチ眼鏡。

シャツは第一ボタンまでとめてあるし、ネクタイを緩めることもなくブレザーもきっちりと着込んでいる。

「架牙深君みたいなタイプがタバコ吸うなんて意外ね」

いくら否定しようと喫煙は決定事項らしいことに苦笑する龍介。

ちょうどその時昼休みの終了を告げる予鈴が鳴った。

早く戻らなければ指導係の教師に今度は藍香自身が注意を受ける羽目になるだろう。

「見逃すのは今回だけよ！タバコは百害あって一利なし！やめなさい！いいいわね！君も教室戻りなさいよー！」

慌てて駆け出し、屋上と校舎内を繋ぐ扉の前で振り返ってそれだけ叫んで彼女は去っていった。

黒崎藍香。

21歳。牡牛座。A型。

家族は父、母、弟。

系列大学の理学部の三回生。

将来の夢は化学教師。

一週間前から教育実習中。

龍介が得ている情報としてはそんな所だ。

何の変哲もない女子大生。

なのに龍介には胸の内をざわつかせる違和感が感じられたのだ。

「…ええ。彼女も容疑者の一人ですから」

藍香を見送って、まるで話し相手がいるように龍介はそう言った。
教育実習生は藍香の他に4人いる。

美術の長谷部杏奈^{はせべあんな}、世界史の松原琴美^{まつばらことみ}、体育の佐々木敬太^{ささきけいた}、国語
の橘要^{たちばなかなめ}。

同じ大学の五人だが学部が違いあまり面識もないようだ。

彼らがこの学校にやってきたのがちょうど一週間前。

切り裂きジャックだの何だのと騒がれ始めている事件が起こり始めた時期と一致する。

犯人がこの中にいる可能性が高い。

そういう情報を得て龍介はこの学校にやって来た。

犠牲者が増える前に何者の犯行かを突きとめたい。

見下ろした先のグラウンドでは体育の授業の準備中だ。

龍介はそこで楽しそうに生徒を指導する佐々木敬太の姿を見つける。

彼も容疑者の一人だが今こうして見ている限りではおかしい点はない。

龍介は教室へと踵を返した。

C r i m s o n F l o w : 2

転校生という身分だが別に真面目に授業を受ける必要はないのだけれど龍介は律儀にも授業をサバろうとはしなかった。

彼は基本的に勉強が好きだ。

けれど彼が人間ではなくなったのは大学卒業間近だったからその時点ですでに高校で学ぶような内容はとくに終えている。

それでも 何度も同じような内容の授業を受けているにも関わらずつまらないとは思わなかった。

時代は常に移っていて、世の中の変化が少なからずそこにも反映されているから。

だから彼は面白いと思うのだ。

欲を言えば高校よりも大学に通いたいと思わないでもなかったが。

「おい！お前が転校生か？」

放課後の校舎裏で唐突に声がかかった。

「誰に断ってここ通ってんだ？」

「すみません。断りを入れないといけないとは知らなかったもので」

とぼけた答えに一瞬の躊躇があった。

「ま、払うもん払ったら通してやるよ」

「はあ」

「通行料だよ、通行料」

金髪やら茶髪やら派手な頭のいかにも不良少年らしい男子5人に前後を塞がれ進むことも戻することもできない。

ありがちな展開だ。

日も傾きかけているのにこんな所にたむろしている彼らはどれだけ暇なのだろうと龍介は表情には出さず思った。

「お聞きしたいことがあるんですが」

「はあ？お前話聞いてた？金出せつつてんだよ！」

「わかんねえなら痛い目見せてやんよ！」

一人がはなつた大振りのパンチは当たれば威力は大きかろうがかわすことは龍介にとって難しくない。

ほんの半歩ずれて体をひねった龍介が軽く肩を押しただけで、金髪の少年はそのまま校舎の壁に突っ込んだ。

「てめえ！ふざけやがって！」

残りの四人が色めき立つ。

数分後。

痛い目を見ていたのは不良少年達の方だった。

「切り裂き事件の被害者の事で聞きたいことがあるんですが」

パンパンとわざとらしく両手を払って龍介は繰り返した。

この場所が不良のたまり場だということは有名な話だ。

転校初日の龍介の耳に届くくらいに。

そして、実は龍介は最初から彼らに会うためにここに来たのだ。

「彼らが事件に会う前に関わった人物はいませんでしたか？」

足元に転がる不良少年はうめき声を上げるばかり。

「痛い目みますか？」

「ま、待ってくれ！あ、あいつら、ウザい先公がいるって…」

もう十分痛い思いをした少年は慌てて答えた。

「教育実習の。黒崎とかいうやつだ。あいつにうるさく言われて頭きてたんだ」

「他に知っている事は？」

「も、もうねえよ！ホントだ」

「そうですか」

彼らが知っているのはそれだけだと龍介は判断した。

黒崎藍香の正義感の強さは体験済みだ。

黒崎藍香が犯人なのか？

先ほどの違和感といいどうにも彼女には引っかかる点が多かった。

藍香は教材倉庫で奮闘中だった。

明日の実験に使う教材を準備するためだ。

ほこり臭い室内でダンボールを漁っていると、ガラリと扉が引かれた。

「あ、ごめんなさい。誰かいるとは思わなくて」

藍香と同じく教育実習生の松原琴美だった。

真っ黒な髪を一つに束ねて分厚い眼鏡をかけて飾りつけが無い。良く言えば真面目、悪く言えば地味で気が弱そうともいえる。

「松原さんも明日の準備？」

「え…ええ、明日使う教材を取りに」

琴美と話すのはほとんど初めてだった。

「この中から探すのはちょっと大変そうですね」

藍香は身長が170cm近くあるからなんだか大人っぽく感じられて、琴美はしどろもどろになりつつもなんとかはにかんだ笑みを浮かべた。

琴美は笑うと可愛らしい雰囲気になるんだ、というのは藍香の感想だ。

しばらく教材を探し回るガサゴソという音だけが部屋を支配していた。

目当ての物を捜し当てたのは二人ほぼ同時だ。

「すごく立派な世界地図ね」

琴美は小柄な彼女の背丈ほどもあるうかという地図のホコリを払っていた。

「最近に使われてなかったみたいです。でもこうやって地図を見ると思っんです。世界にはこんなにも沢山の国があるんだって。そして、その一つ一つの国に物語があつて、人の歴史が国の歴史を作ってきたんです。私はそれを教わったから、私も教師になってそれを伝えたいんです！」

藍香にはそんな風に熱く語る琴美が意外でもあり、素敵だと思えた。

「あ、早くしないと怒りますね！私、行きますね。それじゃ」

「うん、じゃあ。お互い頑張ろうね！」

藍香は教室の前で急ぎ足で去っていく琴美を見送った。

琴美は真面目なばかりかと思っていたけれど話してみると意外に柔らかな印象だと藍香は思った。

「さ、私も早く準備終わらせないと」

悲鳴が聞こえたのはその時だ。

それは、今、琴美が去っていった方向だった。

藍香は廊下に呆然と座り込んでいる琴美の姿を見つけた。

「松原…さん？」

その背中越しに赤く染まった床と倒れた人間が見える。
見覚えのあるセーターと変わったデザインのスカート。
うつ伏せで顔は見えないが教育実習生の長谷部杏奈に間違いなかつた。

杏奈の赤く染めた派手な髪が自らの血で更に赤く染まっている。

「黒崎さん！長谷部さんが…あ、あれは確か…橘君…」

琴美は震える声で教育実習生の一人の名を挙げた。

「橘君？まさか実習生の橘要君！？」

「そう……私…怖くて…見ていることしか出来なかった…」

琴美はよほど動揺しているようだ。

同じ教育実習生の犯行を目の当たりにしてしまったのだとしたら
無理もない。

「橘要はどっちに行つたの！？」

震える指先が示した方向へ藍香は駆け出す。
けれど廊下を曲がった先には誰の姿もない。
たふんとつくに逃げてしまったのだ。

それ以上杏奈や琴美を放ってはおけず、藍香は元の場所へと引き返す。

そこには琴美の姿はなかった。

杏奈は元のままで倒れていて、今までと同じなら命までは奪われていないだろう。

けれど琴美を探すよりも杏奈を病院に運ぶのが先だった。

C r i m s o n F l o w : 3

龍介がその無惨な現場に到着した時、藍香は倒れている杏奈の傍らに屈み込んでいた。

血の匂いに駆けつけてみれば案の定だ。

心の内でやはりとつぶやく。

藍香は手にした小さな小瓶に被害者の血液を採取したようだった。杏奈を発見したというだけならまず考えられない行動だ。

「あなただったんですね？」

藍香が一瞬ビクツと身をすくませ、ゆっくりと振り返った。

「あなたが、やったんですね？」

龍介はもう一度ゆっくりと質問を繰り返した。

あまりにタイミングが悪い。

藍香自身でも直前の行為を考えれば疑われるのも無理がないと思った。

「わ、私じゃないわ！橘要が」

「橘要？それはあり得ません。橘先生なら書道部の部室にいらっしやいましたから」

そう、龍介は藍香を探していて橘要を見つけ、それからしばらく様子をうかがっていたのだから。

血の臭いに気付いたときには確かに彼はそこにいた。

「そんな……!!」

琴美が嘘をついていたということだろうか。
それを言ったところで架牙深龍介が信じてくれるとは到底思えなかった。

「先生、目的はいったい何です？」

「待つて……私がやったんじゃないって証拠を、見せるから」

藍香にしては珍しく歯切れの悪い言い方だ。

「でもその前に、彼女を病院に！」

「……わかりました」

切り裂き犯かもしれない危険な人物を怖がる様子のない龍介に疑問を抱く余裕は今の藍香にはない。

人と呼んで、見つかる前に二人はその場をこっそりと離れた。

場所を教材倉庫に移し誰も来ないことを確認して鍵を閉める。

そうして藍香はさつき得た長谷部杏奈の血液の入った小瓶を取り出した。

龍介はただ黙って藍香の次なる行動に注意を払っている。

一瞬、彼女はためらった。

今から起こることは自分が犯人ではない証拠と共に『普通の人間』ではない証拠を示すことになるだろうから。

けれどそれは今のところ本当の犯人を知り得る唯一の方法でもあった。

「架牙深君、ライター貸して貰える？」

龍介は素直に内ポケットからライターを取り出して手渡す。

まもなく日が沈むのdarou、室内は暗い。

そこにライターの火が灯る。

その火を瓶の口に近付ければ不思議なことにそちらへと燃え移った。

ぼんやり明るい炎は瓶の口でゆらゆらと揺らめき、そこにだんだんと見覚えのある風景が浮かんできた。

この学校の廊下。

向こうから歩いてくる人物。

残酷な笑みに彩られた口元。

あまりに強烈な記憶を血は覚えている。

血に刻まれた記憶は炎によって炙り出され真犯人を映し出していた。

「おい。そこを動くなよ」

突然、龍介の雰囲気が変わった。

今までの行儀の良い表情とは打って変わって口元を嘲笑がかすめる。

ちょうど日が完全に沈みきったことなど藍香は気付こうはずもない。

「架牙深君？」

藍香の脇を何かがかすめ、ピシッと音を立ててガラスが弾けた。

窓に開いた穴が弾痕だと認識できるより早く、ガラスはまるで薄い紙のように切り裂かれ床に落ちて散らばった。

龍介の手の中には拳銃。

窓の外には松原琴美が立っている。

いったいどちらに驚けばいいのかもはや藍香にはわからない。

目の前で繰り広げられた一瞬の出来事はまるでスローモーションのように緩慢で、それなのに思考が追い付かなかった。

銃口を向けられた琴美は悴だけになった窓の向こうで炎の中の記憶と同じ残忍な笑みを浮かべている。

「ジャック・ザ・リッパー？ハッ！まんまじゃねえか」

龍介 いや、今は龍介の体を借りて表に現れた『リュウ』という存在 おもしろくもなさそうに吐き捨てた。

ガラスを紙切れのごとく切り裂いたのは琴美の指先から20cmほども伸びた爪。

その爪は何物をも切り裂くナイフのような鋭さと硬さを備えている。

銃を突きつけられているにもかかわらず琴美は前へと足を踏み出した。

銃弾は容赦なくその肩を打ち抜いた…かに見えたが弾丸は琴美に届く寸前で切り裂かれて足元に転がった。琴美の姿が消える。

動きが速すぎて藍香の目には追いきれないのだ。

リュウには見えているのだろう。

「チイっ!!」

見えてはいても当たらない。

弾をことごとく裂かれて無駄に消費していくことにいら立つリュウ。

「松原さん、なぜ？なぜあなたが生徒や長谷部さんを傷つけたりしたの！？」

姿が見えないのでどこにもなく藍香は呼びかけた。

意外なことに、応じて琴美は動きを止める。

「撃たないで！」

藍香は琴美とリュウの間に立ちはだかった。

二人に身長差はあまり無いから真っ直ぐに視線がぶつかる。

「どけ！」

それでも藍香の視線はゆるがない。

「私は松原さんと話がしたいのよ！」

琴美が驚いたような、それでいて泣き出しそうな表情を浮かべる。

「私はああいう子達が嫌いだった。派手な外見で、いつも地味な私を見て笑ってる。高校生の時に私をイジメた子達と一緒に。だから今でもすれ違う度に怖くなる……」

琴美は切り裂きジャックから元の彼女の表情を取り戻し唇を噛み締めた。

「大人になれば変わると思ってた。けど同じだった。教師になる夢は諦めようと思った。でも、これを見つけた時から私は変わったの。もう怯えることはない。あの子達も、長谷部さんも、嫌な物は

消せばいいってわかったから」

鋭い爪が輝く琴美の指にはアンティークなデザインの指輪がはまっていた。

見つめていると何故か心の中をざわつかせるそれが琴美をこんな風にしてしまったものに違いない。

「こんなやり方間違ってる。嫌な物は消せばいいとは思わない。誰だって苦手なものはあるけれど、それに正面から向き合った時に変わるものなんじゃないの？」

「私にはそんなのは無理よ」

それでも必死に呼びかける。

「そんなことない！逃げるのを止めて振り返るだけで、それだけでいいの。それが変わり始めているってことだから」

「私はあなたみたいに強くないの。…あなたは嫌いじゃなかったけど、知られてしまったから仕方がない…。もう引き返せないの」

また彼女の顔から彼女の表情が消える。

もう琴美を止められないことを示していた。

Crimson Flow: 4

また琴美の姿が藍香の目には捉えられなくなる。

人間には見えないほどのスピードで今度は躊躇なく自分を襲うだろう刃物のような爪を、自らが切り裂かれる光景を藍香はどこか現実味のない感覚で想像していた。

だが次の瞬間、乱暴に腕を引っ張られ、藍香は後方に倒れ込む。ザクツという生々しく耳に残る音を聞いた。

「捕まえたぜ」

琴美にも負けないほどの残忍な笑みをリュウは口元に浮かべる。

指ごと掴み取られ、琴美は食い込ませた爪を抜くことが出来ない。爪はその根元までがリュウの手のひらに埋まり、甲から突き出していた。

深紅の液体が爪を、腕を伝う。

床を濡らす。

けれど痛みなど感じていないかのようにリュウはニツと唇を釣り上げた。

尖った犬歯が覗く。

リュウはいつそ優雅なまでの動作で琴美の白い首筋にその牙を食い込ませた。

琴美の視線はどこか遠い世界を見つめている。

それは恐ろしさと艶美さとを併せ持つ光景だった。

藍香が声も出せないままただ見つめる前で、リュウは喉を通る熱い血を堪能する。

けれどそれが許されたのはほんの数秒。

頭の中では龍介が止めるとうるさく叫んでいた。

吸血行為への強い嫌悪感が自身にまで伝わってきて、リュウは物

足りないまま渋々首筋から牙を抜く。

そして、まだうつとりとしたままの琴美の指から指輪を抜き取った。

指先で弾く。

指輪は宙を舞い、一発の弾丸に狙い変わらず打ち砕かれた。

同時に琴美が意識を失って倒れる。

切り裂きジャックを作り出した魔力は消失したのだ。

「もったいね」

リュウは琴美にも指輪の残骸にももう興味がないという風に腕を伝う自らの血を名残惜しげに舐めとる。

五本の爪に手のひらから甲まで刺し貫かれたはずの傷は跡形もなく消えていた。

「架牙深君… きみ…」

「オレの名はリュウだ。 架牙深君じゃねえ」

本人の言う通りさつきまで架牙深龍介であつた人物は藍香の知る彼ではありえなかった。

話し方と表情の違いでこうも別人になるものなのか。

「えっと… 架牙深君に取り憑いてる… 吸血鬼… とか…？」

「オレは幽霊だよ」

「あ！まさか血を吸われた宵宮さんも吸血鬼になるじゃあ！？」

藍香は恐ろしい可能性に考え至ってあわてる。

「血い吸われたぐらいで吸血鬼になるかよ。お前魔女のくせにんなことも知らねえの？」

“魔女”と思いがけない言葉に藍香は一瞬ドキリとした。

普通の人間じゃない事は知られたとしても、そこまではつきりと言いつてられるとは思っていなかった。

彼が言う通り藍香は魔女の血を引いている。

古くから続く家系だ。

しかし本当に魔女らしく暮らしていたのは数代前のご先祖様まで。藍香自身はといえば人間となんら変わらない生活を送ってきた。むしろ魔女らしいことなんてせいぜいさっきのような簡単なまじないができる程度なのだ。

「わ、私はほとんど人間と変わらないもの！悪い？」

何故だかりユウにはムキになってしまふ藍香だった。

たぶんリユウの態度に腹が立つのだ。

腹が立って拳を握り締めて、そこで初めて藍香は自分の手のひらに違和感があることに気付く。

痛みと濡れた感覚に目をやれば先ほど倒れ込んだときにガラスで切ったらしい傷があった。

吸血行為を目にしたばかりの藍香は反射的に血を見せまいと手を隠す。

しかしそんなことをしてもリユウには気取られていたのだが。

「ハンッ。安心しろ、てめえの血だけは頼まれてもいらねえ」

彼はしつと手を振るジェスチャーまで交えて拒絶した。

「なっ…！？どういう意味よ！」

ホッとしたけどなんだかまた腹が立つ。
助けて貰っておいて何だが藍香はこのリュウという吸血鬼に良い感情を抱けずにいた。

「さて、オレは帰るわ」

「え？ちよつと！このまま放っておくの！？」

室内にはガラスがちらばっているし弾痕はあるし琴美は倒れたままだ。

「あとは山城っておっさんが来るからやらせりゃいい」

「ちょ…それって誰よ！待ちなさいよ！」

去っていくリュウを琴美を放ったままでは追うことも出来ず、藍香はその後ろ姿を見送るしかなかった。

Crimson Flow：エピソード

藍香は屋上で空を見つめていた。

今日も鳶は優雅に輪を描いている。

彼と出会った場所だ。

けれどここに来てみても架牙深龍介の姿はあるはずもない。

わかっているのに藍香は足を運ばずにはいらなかった。

結局彼には助けて貰ったのにお礼すら言っていない。藍香の今があるのは彼女のお陰なのに。

リュウが立ち去った後、途方に暮れていると山城という人物は本当に現れた。

刑事だという。

藍香はこの惨状をどう説明したらいいものかと慌てた。

犯人と疑われて逮捕されるかもしれないと思った。

けれどその人はリュウから事情を聞いていると言い、おまけにこんな怪奇な事件には慣れているようで、簡単に話を聞いただけで帰してくれたのだった。

今回の事件は全て内密に処理されるという。

だから藍香はあんなことがあったのに比較的平和に教育実習を続けることが出来ている。

警察に保護された琴美がどうなるのか考えると内心平和とは言い難かったけれど。

ともあれ藍香は今日で実習を終えこの学校を去る。

教師になったら彼に　いや、彼らにまたどこかで会えるだろうか。

たぶん会えない方が幸せなのだろうけど。

あんな目に遭うのはもうごめんだと心底思うのだけど。

どこかで会えることを期待している自分がいるのだ。

教師になりたいというのは小さい頃から抱いていた夢。

それに向かって進んではきたけれど、こんな事件に関わるまでそれはまだ夢だった。

琴美はあんなにも熱く夢を語っていたのに。

彼女はどこかで道に迷ってしまっていたんだろう。

琴美のような子がいたら一緒に道を探して、そして背中を押せるようになりたい。

藍香の中で、夢であったものは決意をとまって今はっきりとした目標となったのだった。

Crimson Flow:エピソード(後書き)

本編では書ききれない話がたくさんあるので外伝として書いてみることにしました。

第一弾は架牙深龍介のお話。（「りゅうすけ」ではなく「りょうすけ」と読んでやってください。）

龍介の話はシリーズとしてやってみたい気がします。

他にも書きたい話はいっぱいあるのですが筆が遅すぎて…

次の更新がいつになるかは今のところ未定です（汗）

本編はものすごくゆっくりとですが歩を進めております。
もしよろしければそちらもよろしく願います。

読んでいただき本当にありがとうございました。

隣の草薙さん：プロローグ（前書き）

キャラクターについては本編（特に第10部～15部）を合わせて読んでいただくとわかりやすいかと思います。
どうぞよろしくお願いします。

隣の草薙さん：プロローグ

長きに渡り他国との外交を絶っていたこの国は黒船の来航により新たな道を歩もうとしていた。

後に幕末と呼ばれるこの時代の中で、庶民は来る日本の変革にまださほどの関心を示していない。

というよりも、慎ましやかに暮らす人々にとって、日々をつつがなく過ごせるということこそが最重要であり、日々の営みを守ることで精一杯なのだ。

これはそんな時代にあった小さな物語。

門前町として栄えるこの町は昼間なら参拝のためにやってきた人々が多く行き交い、商店が軒を連ねなかに賑わっている一角だ。しかし今は草木も眠る丑三つ時、墨を塗り込めたような深い闇に全てが包み込まれていた。

その闇の中を走る影がある。

袴姿の侍風の男が数人。

手に行灯を持っている者もいてそこだけぼんやりと明るい。

その前を走るのはいりり小さな人影だ。

小さめの影は先の見えない暗闇の中を必死で逃げていた。

けれどやがて神社の境内に迷い込み、追い詰められてしまう。

朱塗りの鳥居の前で侍風の男達は自分よりやや小振りのその影を困った。

「狙ったのが俺達だったのが運の尽きだ」

「さあ正体を現せ」

追われていた小柄な美女がかざされた行灯から眩しそうに目を背ける。

「何の事やらわかりません。私はただ道案内を…」

「ついて行つて川にはめられたり、持ち物をとられた人間が大勢いるのは知っているぞ」

「そうやって何人の者を化かしたんだ！」

女に侍達が詰め寄る。

一人が腰の刀を抜きはなつた。

「ひい…、ごめんなさい。もうしませんから。許して」

女は狸の姿に変わっていた。

「命ばかりは！」

「だめだ、化け物の言うことなど信じられるか」

侍は拝むような格好の狸に刀を振り上げる。

しかしそれを振り下ろすことは出来なかった。

「やめておけ。もう十分だろう」

男達が一斉に声の主を向く。

誰一人自分達のすぐ近くに立つその人物にその時まで気付かなかった。

気配を感じなかったのだ。

刀を抜いた本人ですら腕をつかまれて初めて気がついたほどだった。

すらりと背の高い、こちらも袴姿の男に、行灯を持った一人が光を向ける。

一瞬息をのんだ。

束ねた髪は赤く、薄い色の瞳が光に透けて金に近い色に見えた。髪で顔の左半分は隠れていたがそれでもわかるほどに整った面差しの青年は、感情を浮かべずただ静かに男達に鋭い視線を配る。

「は…離せ！貴様何者だ！？」

腕を掴まれていた男がやっと我に返って言った。

腕を振りほどこうとするがびくともしない。

手近にいた一人が助太刀とばかりに刀を構えた。

そちらに掴まえていた男を押しやって、青年は地面にうずくまっていた震えていた狸を拾い上げる。

一人の男が斬り込んだ刀は空を切った。

それを合図に次々と追ってくる斬撃。

鉄と鉄の打ち合う硬い音が響いた。

いつの間にか青年の手には一振りの日本刀が握られている。

抜き身ではなく美しい模様の鞘に納まったままの刀が幾度か刃を打ち返す。

男達とて伊達に刀を差しているわけではない。

やがて避けるばかりではいかなかった青年に複数の刃が迫った。

しかし次の瞬間男達は驚愕の声を上げる。

刀が半ばから折れていた。

いや、むしろ断ち切られたと言った方がいい鮮やかさで、白々と輝く刃の残像だけが視界をかすめる。

刃先が地に落ちた時にはすでに狸共々青年の姿は目の前から消えていた。

隣の草薙さん：1

神社の入口に佇む鳥居よりも更に高い位置に一人と一匹の姿があった。

人にはとうてい登るのが困難な背の高い大木の枝の上だ。

下にはまだ男達がうろうろと辺りを探し回っているのが見えた。

青年の腕の中で狸が不安そうにまん丸な瞳で見上げた先にはお月様とよく似た金の色の瞳。

頭を撫でられれば化け狸は少し安堵した表情で目を細めた。

青年はしばらくしてひと気のなくなつたのを見計い一跳びに地上に降りる。

「これに懲りたら人間をからかうのはやめておけ」

やっと地に降ろされた狸は何度も振り返りながら礼を言って去っていった。

それから数日後の朝のことだ。

雲らしい雲はなく空はどこまでも青い。

空気は澄んでいて日差しがやっと暖かさを帯びてきた頃。

「あーおーいーちゃーん！ー！！」

ドタドタと騒がしい足音が廊下を渡っていく。

見た目は年頃の娘なのにそうとは思えない騒がしさであったが、当人は全く気にする風もなく全力疾走中だ。

程なく中庭に目当ての人物を発見して伊緒里いおりは勢い余りつつも足を止めた。

「つと、…こんなところに…おったんかいな」

息を整える間もなく言えばほうきを抱えたまま屈み込んで鶏に餌をやっていた蒼あおいが振り返り少女のように可愛らしい大きな瞳を何事かとぱちくりさせる。

しかし伊緒里が騒がしいのはいつものことなので蒼は餌やりを再開した。

「ちょ、ちよつとお、鶏とたわむれてる場合やないで！」

「洗濯は？」

「それどころやないんやて」

「何かあったの？」

そう聞いたのも半ば事務的だった。

「道場破りや！」

「どつじょうやぶり？」

「蒼はやつと立ち上がる。」

「そつや！今、来とるんや！」

蒼は愛らしい面に怪訝な表情を貼り付けた。

「とにかく、一緒に来てえな！」

言うが早いか伊緒里は蒼を抱え上げる。
先程と同じ勢いで廊下を引き返した。

質素な造りの屋敷にはこれまた質素な道場が併設されていた。

既に相当の野次馬が道場をのぞき込んでいる。

いつてもそのほとんどが人間ではなく妖あやしの類であつたのだが。
道場の中では数人の男達がへたり込んでいる。

「これでうちの門下生は全部ですよ」

屋敷の主人、さかきかわせいいちろう榊河成一郎は困つたように頭をかきながら言った。
道場の主とは到底思えないような優男である。
それもそのはず

「もともとうちは妻が指南役でね。その妻も今は身重みおもで動けませんし、私なんてただのお飾りですからねえ」

ということだった。

「いやいや、ごまかそうだったって無駄だ。うちの門弟が見た凄腕の剣士はこの道場に出入りしていると調べはついてるんだ」

対する道場破りの男は、体格が良く強面、それでいてどこか親しみのわく表情も見せる。

年こそまだ若いがいかに頼りがいのありそうな男だ。

「確か背の高い、赤い髪の毛、えらく綺麗な男だったと聞いているんだが」

外にいた者達が、黒髪で年は十ほどの小柄な少年である蒼に一斉に視線を集めた。

成一郎はまた困ったという風に頭をかく。

「ああ、確かにそういう者はおりますね。しかしアレはうちの流派ではないのでねえ。どうぞお引き取りを」

「だが、このままだと俺は看板を持って帰ることになるぞ。困るんじゃないか？」

「…なるほど、確かに、それは妻に半殺しにされかねないな」

「ならば、その者を呼んでもらおう」

道場破りはにやりと笑みを作った。

「というわけだから、よろしく」

成一郎は道場を出てまっすぐに蒼の元へとやって来た。
どうやら覗いていた事に気付いていたらしい。

「どこで見られていたのだから知らないけれど、お前が目立つ容姿なのが悪いんだからね。ほら、主人の命を助けなさいね」

この人はいつもこんな感じで飄々としてどこまでが本気かわからない。

榊河家の本筋から随分遠い家に生まれながらその霊力の高さ故請われて術を継いだ。

蒼の主人となることを引き受けた際、榊河の実力者として立派な屋敷を持つことだったてきたのに元の質素な暮らしを続けることを条件にした変わり者、というのが一族内の評価だ。

けれど蒼も今の暮らしは悪くないと思っている。

今は契約者のいない伊緒里もここが気に入っていつの間にか居着いてしまっているし。

だから今はとりあえず道場と主人を護るために一働きしなければならぬようだった。

ため息を一つついた瞬間に少年の姿は消え失せて、代わりに赤い髪を高い位置で結った青年が出現している。

「蒼ちゃん、頑張れー！」

伊緒里の緊張感に欠ける声援と周りの視線を受けて蒼は道場の入口へと向かった。

道場の主につれられて現れたのは想像よりよほど若く線の細い男だった。

髪で顔が半分ほど隠れているがなるほど弟子達が言う通り、男にしておくには少々勿体ないくらい整った顔立ちをしている。

そう思つて道場破りは寸の間見とれ、それから我に返つて言った。

「俺は今度近くに道場を構えることになつたくらなぎふうのしん草薙楓之進という。一つ手合わせ願いたい」

「……ほら」

成一郎が背を押す。

「蒼だ」

勝負の前に名乗るのは礼儀だと成一郎に促され蒼は渋々そう言った。

「真剣か木刀かどっちだい？あんた、どっちでやりたい？」

「……そちらの好きにすればいい」

そう答えた蒼に木刀を手渡したのは成一郎だ。

「手合わせなら木刀で十分でしょう。流血沙汰になったら掃除が大変だ」

楓之進も素直に木刀を手取る。

どちらからともなく構えて向き合った。

瞬間、空気は肌が切れそうなくらいに張り詰める。

先に仕掛けたのは楓之進だった。

蒼はそれをあえて真っ向から受け止める。

体格で見れば己に力の分があるように見えるのだが楓之進は受け止められた獲物をそれ以上押すことができなかった。

楓之進には構え合って初めて気付いたことがある。

蒼の左の腕には指先まできっちり包帯が巻かれているのだ。

しかし剣を交えてみればその包帯が怪我のためではないことは知れた。

勝負を優位に進める要素には成り得ない。

一度二人は離れる。

互いに隙が見いだせないというようにしばらく距離をとった。

次に打ち込んだのもやはり楓之進の方だ。

蒼は今度は受け止めはしなかった。

受け流し、相手の懐に飛び込み様に一撃。

楓之進は見た目にそぐわぬ素早い動きで跳びずさる。

直撃を免れたのはさすがというべきだろう。

しかし蒼はすでに楓之進の動きを追っている。

手が痺れるほどの打ち込みを今度は楓之進が受け止める形になった。

何とかしのいだが次の一撃は楓之進の手から木刀をもぎ取っていく。

それでも反撃に転じ蹴りを繰り出した所に腹部を尻ぐ一撃。

真剣であったなら命が無かっただろう。

そう思ったときには楓之進の意識は暗い闇へと引きずり込まれて

いた。

隣の草薙さん：2

「まだ目を覚まさないのかい？」

成一郎は頭をかく。

妖達は横たわる道場破りを取り囲んで、つついてみたり髪を引っ張ってみたり興味津津だ。

屋敷の一室に寝かされた楓之進はしばらく目を覚ましそうにない。

「蒼、やりすぎだよ。まったく」

咎める言葉に答えず、少年の姿の蒼は楓之進の額に乗った手ぬぐいを桶の水で冷やし直した。

確かにやりすぎと言われればそうだろう。

最初はもっと適当にあしらうつもりでいた。

だが、この男はそうする余裕を蒼に与えないほどには腕が立ったのだ。

それに蒼は勝負を急いだ節があった。

鶏の餌やりも庭の掃除も途中だったし、なによりこんな洗濯日和を逃す手はないと思ったのは最近すっかり奥方の代わりに家事に勤しんでいるからである。

式神をこんなことに使うのもこの主人くらいだけだ。

やってみるとなかなか没頭してしまう。

「この道場破り、人間にしたらまあまあやる方や。それに蒼ちゃんのこと知ってたみたいやんか。何者なんやろか？」

伊緒里は蒼の隣で楓之進を興味深げに眺めた。

「さてね。うちはそっちの道じゃ有名でもないし道場破りされる覚えはないんだがねえ」

「その事だけど、実は…」

楓之進は蒼の事を弟子から聞いたと言っていた。

その弟子が誰なのか蒼には見当が付いている。

といっても誰といえるほど知っているわけではないが、狸を追いかけていた侍達と楓之進の太刀筋はよく似ていたのだった。

「どうして黙っていたんだ」

数日前の出来事をすっかり聞き終えたあと成一郎は小言をこぼす。ただでさえお前は目立つのに、と。

蒼があのあたりに出向いたのは元はいえは成一郎の命めいによるものである。

言い渡されたのは妖怪騒ぎの調査……のついでに安産祈願で有名な神社があるから御守りを買ってこいというものだった。

たぶんそっちが本来の目的で、調査は建て前だと蒼にもわかってはいたのだが。

神社にたどり着いたのは夜も更けた頃で、追われていた狸に出くわして妖怪騒動を解決したものの結局御守りは買えず、手ぶらで帰ってかなり文句を言われた。

その上人間相手に大立ち回りをやらかしたなどと言おうものなら確実に小言が増えるのは目に見えている。

だから黙っていたのだが結局しつかり小言を聞くはめになった。

「しかしその男達、妖とわかっていてその狸を追っていたんだね？同業者…だったら知らないはずないんだが」

「この楓之進という男もそうだけど、あの時の男達も術の類はたぐい一切使わなかったんだ。本当に同業なのかどうか」

妖退治を生業としているのなら、追っていた妖を逃がした蒼に対し腹を立てたとして説明もつくが。

その時だった。

うおっとかうわっとかいう声に目をやれば道場破りが布団の上で上半身を起こした姿勢で固まっていた。

視線は取り囲む妖達に注がれている。

普通の者には見えぬ小さな妖が彼には見えているようだ。

「やっぱりあんたこの妖らがみえるんか？」

伊緒里が腕を組んで凄みを聞かせて覗き込む。

「見えるんやな？」

「…ああ」

楓之進もさすがにたじろぎ頷いた。

妖が見えても囲まれることに慣れてはいない。

「お前たちがいると話が出来ない。少し離れていておくれ」

固まった楓之進に助け船を出したのは成一郎だった。

妖達も屋敷の主に言われれば仕方がない。

わあわあ騒がしく布団から離れた。

「驚いた。術物の類が大人しく言うことを聞くとは」

楓之進は意外そうに目を見開く。

術物　つまり化け物が人間と仲良くしているのがよほど珍しいらしい。

同業者ならば榊河家と知った上でこういう反応をするのは珍しいことだ。

「化け物に取り憑かれ困っているなら力を貸すつもりで来たんだが…どうやら見当はずれだったらしい」

「そないこてんぱんにやられとって力なんか貸せるんかいな」

「全くだな」

伊緒里の齒に衣着せぬ物言いに楓之進は苦笑を浮かべる。

剣を交えたのが退治するべき凶悪な妖だったなら今頃は…。

「そちらは妖退治を生業とされていらっしやるんで？」

彼は榊河を知らぬようで、成一郎にしてもやはり草薙という名は心当たりがないのだが改めて確認する。

「いや、仕事ってわけじゃない。ただ、昔から常人には見えぬもんが見えるんでね」

腕っ節をいかして妖に困っている者の手助けをしているのだという。

「噂を聞いてか入門して来るのも“見えちまう”のが多いんだ。今じゃ道場ぐるみだな」

道場主だというのも近々この近くに越してくるというのも本当らしい。

「さっきの綺麗な兄さんも、やはりあれか？人ならざる者ってやつかい？」

「なんや、わからんと挑んだんかいな」

伊緒里はあきれたような、面白がるようなそんな表情だ。

「そこにいるそれだよ」

それ呼ばわりされた蒼はあっさりと正体を暴露されたことに顔をこわばらせた。

「成一郎！？」

日頃から目立つなと口を酸っぱくして言う彼がとるには意外な行動だ。

楓之進は蒼よりも更に驚いた。

このちよこんと座った人形みたいに可愛いのと見た目には美人だが喋ると騒がしいのはこの家の娘か道場主の妹かと思っていたのだが、その子供の方があの青年なのだと言われればにわかには信じがたい。

「本当か！？普段はその姿なのか？」

「そや。あないに別嬪やったらちまたで目立つやろ？まあウチはこちの姿も可愛くて好きやねん」

伊緒里が見当はずれな回答を返した。

楓之進はぐるりと周囲を見回す。

これだけ妖がうじゃうじゃという屋敷は初めてだと改めて思った。

「こんなにも化け物がいて危険じゃないのか？まさかあんたも」

「私は人間だよ」

成一郎はクスリと笑う。

「この子等は草木と同じで自然界に当たり前に存在している。面白そうな事があるとすぐに集まってくるんだ。うちは代々妖と縁深い家だね。妖がらみのやつかいごとがよく舞い込んでくるんだが、たいがい人間が火種を作っているものさ。でなければ他愛ないただのいたずらですよ」

楓之進はこれまで妖を退治してきてそんな風に考えたことはなかった。

妖が全て悪だとは言わないが、人間を困らせるやつかいでわずらわしい存在と考えていたのだ。

「しかし、いいのか？そんな事まで俺に話して。普通、退魔師の家系はあまり大っぴらにそうだと明かしたがるんじゃないようだが」

「ご近所のよしみですよ」

成一郎は嫌みのない笑みを浮かべる。

「まああなたも私も同じようなもんだ。協力してやっていく方が互いの利になるでしょう？仲良くやりましょう」

「あ……ああ」

この榊河成一郎というつかみ所のない男はおそらく己とは比べ物にならないほど深い闇を見知っていると思えてならなかったが、こ
うやって化け物達とほのぼのと過ごしている所を見れば悪意のある
言葉とも思えず、楓之進はただ頷くしかなかった。

隣の草薙さん：エピソード

それからというもの、楓之進は度々榊河の家を訪れては蒼に手合わせをせがむようになった。

その日も早朝からやって来たと思えば、準備運動とばかりに成一郎の道場の門下生達をばったばったと投げ倒している最中だ。

門下生の中には妖の血を引く者もいるのだが適わないほど、楓之進はやはり相当に腕が立った。

「また来てるんだけど！」

「ちよいと相手をしてやればいいだろう。減るもんでなし」

「洗濯物が片付かない！どういつつもりなんだ！？」

蒼は中庭で洗濯用の桶を抱えたまま、納得いかない顔で主を見ている。

こうなったのも成一郎が蒼の正体を明かしたせいだと言いたげに、ほづきが投げ捨ててあるところを見れば伊緒里はとくに掃除をほったらかして道場の様子を見物に行ってしまったようだ。

このままでは掃除も終わらない。

やれやれといったように成一郎は頭をかいた。

「どういつつもりって、あの男に言った通りだよ。味方は多い方がいいだろう？」

成一郎の視線が虚空に投げられ、そこにない何かを見つめる。

「これからこの国は変わる。時代が動き動乱が起こるよ。進むべき

道を示す者が現れるまで人の世は混乱し、人の心が乱れれば魔性が多く生まれるものさ。人にも妖にもね。そんな時に仕事の邪魔をされては厄介だ。こちらに取り込んでおくにかぎるさ」

それは彼の本音だっただろう。

成一郎の言葉通り時代のうねりはやがて大きくなり、人も妖も巻き込んでゆく。

人は変化を受け入れるのに時間がかかる。

受け入れてしまえばなんて事はないのに反発は必ず生まれるのだ。それに伴って生じる歪み。

激動の時代の裏でもやはり光と闇の秩序を保つ役目を榊河は担わねばならない。

それが過去から現代へと脈々と受け継がれる榊河の営みの一部であるのだから。

隣の草薙さん：エピソード（後書き）

番外編第二弾は楓太のご先祖様と榊河家の出会いの物語でした。

幕末好きです！

なので幕末の話を書いてみたのですが、残念ながらあまり詳しくないもので。

ほのぼの話を書きたかったということもあり、さらーっと日常を描いた話になってしまいました（汗）

読んでいただきありがとうございました。

雪うさぎ（前書き）

今回は本編の七年あまり前のお話です。

キャラバトンにて叶斗は3月3日生まれということが明らかになりましたので、誕生日記念に書いてみました。
では、どうぞー

雪つなぎ

叶斗は誕生日があまり好きじゃない。

否、正確には自分の生まれが今日なのが嫌なのだ。

三月三日。

雛祭り。

彼は今日で九つになったというのに少しもワクワクした気分になれずにいる。

おめでたい気持ちになれないのは少しばかり素直ではない彼の性格的な問題だけではない。

もう三月だというのに雪が降っていた。

「かなちゃん、こっち！」

自分とあまりかわらないくらいの子供の声が呼んでいる。

父の式神だった蒼には現在契約を交わした主がいない。

叶斗は彼を式神にするべく修行中の身で、今もその一貫であると言えた。

そろって人形みたいに可愛らしい二人はここ数日街を走り回っている。

逃げ出した雛人形を捕まえて持ち主に返すために。

この時期になると必ずそういった依頼が少なからずあった。

雛人形も羽を伸ばしたいらしい。

その人形は大切にされてきたからこそ心を得ただけど、大切にしまわれているのも退屈で、せつかく箱から出られたのだから外の世界を満喫したいと思うのも仕方がないのかもしれない。

けれど雛祭りに雛人形がないのでは始まらない。

そんなわけで叶斗と蒼はこうして街中を走り回っているのだ。

「あの子で最後のはずだよ。早く持ち主に返して、ケーキ買って帰ってお誕生日会しなきゃね」

「そんなの必要ない。子供あつかいするな！」

と言ってもまだ十分子供だ。

叶斗はぶいっとそっぽを向く。

足元を見ずに走ったものだから雪と泥でぬかるんだ地面に足をとられた。

転びかけた叶斗を慌てて蒼が支えて泥だらけになるのは避けられたが、追っていた人形の姿が消えている。

見失ってしまった。

「ぼくあっち見てくるから、かなちゃん少し休んでていいよ」

「僕は別に」

疲れてない、と言おうとしたけど実際には少し疲れていた。

でなければ雪で滑ったりするほど注意力散漫になったりはしない。

蒼はニコリと笑み作り堀を軽く乗り越えて姿を消す。

それが兄貴風を吹かせているように見えて叶斗は眉間にシワを刻んだ。

本当は子供扱いされたって仕方がない。

蒼は今は叶斗とさほど変わらぬ年に見えるが、実際はもっとずっと長く生きていて、立派に成人した本当の姿だつてある。

それでも反発してしまうのは早く彼の主となり榊河家を率いていかなければという焦りにも似た感情からだつた。

とはいえひとまず小休止。

雪はしんと積もり続けている。

コートの際をぎゅっと閉じて、叶斗は白いため息を吐き出した。一年に一度きりの特別な日なのになぜ他人のために駆けずり回っているんだ。

きつと毎年こうなるんだろうな。

父が生きていた時も三月三日は決まって忙しそうだったっけ。

誕生日会もバースデーケーキも自分には必要ない。

さつきそう言ったのは八割方強がりだ。

気が滅入るから考えないようにしているけど。

今日は女の子の成長を祝うお祭りだから同じくらいの年頃の女の子達は家族で楽しく過ごしているだろう。

自分だって本当なら暖かな部屋でケーキを食べてまた一つ大きくなったことを祝われていたっておかしくないのに。

ちよつと寂しくなった。

誕生日なんて祝っている暇がないのはわかってる。

父がいなくなつて、役目を継ぐのは自分なのだから。

早く父のような立派な術者になるんだという使命感が残りの二割。それで何とかくじけずに済んでいるけど。

やっぱりケーキは食べたいと言えば良かったかも、などと考えていた時だった。

雪をかぶつた生け垣の向こうで何かが息を殺している気配がする。

さつきまで逃げ回っていた雛人形だろうか。

その割には邪悪な気配に思える。

叶斗は足音をたてないようにそつと近付くことにした。

とはいえ向こうはこちらに気付いていて、様子をうかがっているようなのだが。

一步。

また一步。

生け垣の中の妖は動かない。

更に一步。

突然妖気が強まった。

同時に生け垣から灰色の生き物が勢い良く飛び出して来た。

それは人間の頭ほどもあるつかという巨大なネズミ。

動物達の負の念が生んだ魔性の存在だ。

捨てられたペットや虐げられた動物達から生まれたものだから人間を恨んでいる。

人間を恐れてもいるから普段はあまり人を襲わないが、今目の前にいるのは幼い子供ただ一人。

それを幸いとはかりにこちらを威嚇して鋭い歯と爪を向けてきた。叶斗は素早く九字を切る。

精神を集中させ、調伏のための符を取り出し真言を唱えようとするが妖怪は思った以上に動きが速い。

思わず後ずさって、叶斗はポケットからこぼれ落ちたものがあることに気づいた。

それは父が残した符だった。

お守り代わりに持っていた物だ。

薄い紙でできた符はひらりと白い雪に落ちて、懐かしい父の文字が一瞬力を帯びる。

まだ込められた霊力が残っていたのかと思い見ていたら、そこから雪が盛り上がりつつ何か丸っこい物が生まれ出た。

雪でできたうさぎ。

大人の手の平ほどの大きさのそれは、雪の上を素早い動きで跳ねる。

跳ねた跡から一回り小さなうさぎが何匹か生まれ出た。

うさぎ達はネズミに近付き周りをとり囲むように跳ねて回る。

うつすらと境界が出来たことに叶斗は気付いた。

ネズミの動きが鈍る。

印を結んだ指先をもつ片方の手の中の符にかざし霊力を込めて放

った。

ネズミはほんの小さなネズミへと分裂して様々な方向へ走り出す。何匹かは雪うさぎに阻まれたが大半は逃げ出した。

けれどさざ波のように力が広がって飲み込まれた化けネズミ達は抵抗むなしく浄化されてゆく。

やがて放った符だけを残してそこに静けさと真つ白な風景が取り戻された。

叶斗が緊張をといて息を付くとうさぎも跳ねるのをやめる。

足元にあるのはもうただの雪でできたうさぎだった。

しかし父の思いは死してなお自分を護ってくれたのだと、叶斗は嬉しくも切ない気持ちになる。

窮地を救ってくれたその雪うさぎをそっとすくい上げた。

「かなちゃん！大丈夫！？」

ただならぬ気配を感じて慌てて戻ってきた様子の蒼はしっかりと雛人形を小脇に抱えている。

「雪うさぎ？雪が降るとゆきちゃんもよく作ってたっけ」

ゆきちゃんとは叶斗の父倅史のことだ。

そう言われてみれば雪が降った日は雪だるまではなく作るのは決まって雪うさぎだった気がする。

自分が仕事を任せつきりにしてそれを作っていたと思われるのは心外だが、それを訂正するのはこの際どうでもいい。

蒼の少し後から現れた良く見知った二人の人物に叶斗は目を見張る。

「帰ったのではなかったのですか？」

叔父の暁史とその式神伊緒里の突然の出現に叶斗は驚きを隠せなかった。

二人は数年前から関西に居を構えている。

昨年叶斗の父親が亡くなってからは何かと気にかけて、こちらとあちらを行ったり来たり。

急ぎの仕事が入り今頃には関西へと発っているはずであった。

「この雪やさかい、出発を遅らせることにしたんや」

伊緒里の関西弁は静かな雪景色に底抜けに明るく響く。

「じゃあ…今日はこっちに？」

ためらいがちに叶斗は聞いてみた。

「ああ。叶斗の誕生日を祝ってから帰っても遅くはないさ」

暁史が髭を生やした口元に優しい笑みを浮かべる。

「ケーキ買ってあるで。プリンが乗ったやつや！」

叶斗の好物がプリンだということはわかっていいるのだと伊緒里は得意気だった。

本当は誕生日の事も、好物の事も覚えていてくれたことが嬉しかったのだけど、叶斗はそんなのどちらでも良かったのにか言ってみる。

ただやっぱり嬉しさを隠しきれていないことは自身では気付かない。

蒼がそれを見てこっそりと面白そうに笑っていたことも。

叶斗は雪の降る日は悪くはないと思った。

舞い落ちる雪は儚くて最初は物寂しく見えたけれど。

何もかもが真っ白に染められて綺麗だ。

冷たいのに暖かいこの雪うさぎも。

もう動かなくなったそれを　いずれは溶けてしまうそれを、叶斗はできればずっと眺めていたいと思ったけれどそつと地面に降るす。

「かなちゃん！早く帰って誕生日会しよう」

蒼のそんな言葉に呼ばれたからだ。

「ケーキ全部食べてしまおうで？」

伊緒里が意地悪な笑みを浮かべる。

「いま行く！」

今日が毎年雪だったらしいのに。

そしたら三月三日の誕生日も悪くない。

そんな風に思い、けれど自分がこうして走り回っている事で誰かの笑顔が守られているならそれはそれでいいかな、と思う叶斗だった。

雪うさぎ（後書き）

本編で蒼の過去編を書いたので、叶斗の過去にもちよびっただけ触れてみました。

書いてみたら彼らは基本的にあまり変わっていなかったりしました。たぶん父親がいた頃にはもう少しかわいげのある叶斗だったと思われますがその辺りはまた機会があれば書いてみたいと思います！

読んでいただきありがとうございますm(´`´´)m

C r i m s o n F a n g : プローグ (前書き)

こちらは『C r i m s o n F l o w』の続編となっております。

血やグロテスクな表現が苦手な方はご注意ください

Crimson Fang:プロローグ

月の光が闇をいつそう濃く作り出すその日。
女性は仕事帰り、駅へと向かう途中だった。
足下に転々と黒っぽい染みが落ちていて。

彼女は何気なくそれを目で追う。

その先はビルが影を落としているが街灯により完全に暗闇にはなっていない。

何かいる。

暗がりですくまる何か。

その何かと目が合った次の瞬間、彼女は引きつった悲鳴を上げていた。

その悲鳴が引き金になったかのように、それは目でとらえられないほどに速く女性の腕に噛みついた。

しかし血の滴るのを見て、怯えるように牙をはずす。

悲鳴に気付いて駆けつけた人々は逃げ去って行く巨大な犬の姿を見たと言った。

「あれは、犬なんかじゃない。化け物でした」

それは人間と獣の間のような姿をしていた。

後日になって、唯一その姿をはっきりと目撃した女性だけが証言した内容は表立って取り上げられる事はなかった。

世間的には野犬騒動として認知されるに止まる。

しかし、裏腹に、人々の知らないところでこの事件は大きく動いていく。

闇を知るほんの一握りの人間と、闇に属する者だけがそれを知っ

て
い
た。

C r i m s o n F a n g : 1

人工の明かりが月明かりをぼやけさせる。

光に住まう者。

人間達はそういった自負でもあるのか闇を拒み、自らの手で光を作り出してしまった。

闇を完全に消し去ろうとするかのように。

闇に住まう者。

今となつてはその存在に気付く者は少ない。

それくらいひっそりと彼らは生きている。

ほんのわずかに残された街の闇に 時には人の中に潜みながら。

そう、普通であれば闇は光をかき消すことはない。

ただ時にその秩序からはずれた行動をとる者が現れるのも事実。

それは自らの意志か魔性に囚われての行動か。

だが、それに目を向ける人間はほとんどいないだろう。

現に街の片隅で起きた野犬騒ぎは今は雑踏の中に紛れてしまっている。

殺人事件ならともかく、ただ噛みつかれて怪我をしただけでは人々の記憶に長くは留まらない。

目まぐるしく移り変わる物が多すぎて、人は変わらず存在する闇に警戒心をなくしている。

しかし、その闇に関わる事を余儀なくされ、その闇の中に生きる意味を見いだす者がいることもまた事実なのだ。

窓の外にはまだ眠ろうとはしない街の明かりが駅越しに見える。

「痛っ…」

くろさきあいか
黒崎藍香は書類の束と格闘しつつ小さく声を上げた。

彼女がいるのはさして大きくはないビルの中、駅前に近頃開校した予備校の一室だ。

藍香はこの予備校でアルバイトをしている。

高校教師を目指す自分にとって、きっと将来役立つだろうと考えたからだ。

とはいえ仕事内容は雑用が大半を占める。

今も資料室で書類を整理していたところだった。

その最中ホッチキスの針に指を引っ掛けてしまったのだ。

傷は大したことは無いのだが、玉のように浮かんだ血が流れ落ちそうになって慌てていると横手から伸びた手がさっとそれをハンカチに包みこんだ。

「大丈夫かい？ 気を付けて」

声をかけてきたのは同僚の男性講師だった。

彼の名はジェイド・レイン。

かなり日本語が堪能なのだがドイツ系のアメリカ人とかなんとかで、彫りの深い顔立ちに優しい笑みを浮かべている。

グレーのスーツに身を包んだすらりとした長身の彼は映画俳優のようにハンサムな顔立ちとアッシュブラウンの癖のある髪が相まって、女子生徒からの人気は絶大だ。

「す…すみません!!」

かくいう藍香自身も例外ではなかった。
あまりに近くで碧い瞳と目が合って顔が熱くなった。
頭の中までぼーっとしてしまう。

「少し押さえていればすぐに血は止まるよ」

そう言ってジェイドは抱えてきた書類を整理し始めた。
二人きりの空間に藍香の心臓は鼓動を速めている。

「君はあの月を美しいと思うかい？」

ジェイドが唐突に窓の外を眺めやって言うものだから藍香はとまどった。

「月…ですか？」

空に浮かぶ月は真ん丸にはほんの少し足りない形をしている。

「そうですね、今日は雲もなくて月が綺麗に見えますね。満月だったらもっと素敵でしょうね」

「僕にはどうもあの月というものが綺麗とは思えなくてね。特に満月がね。変わっているかな？」

「いえ…同じ月でも人によって好き嫌いはあるというかなんというか…。何か嫌な思い出でも？」

藍香は返答に困り質問を返した。

「幼い頃怖いおとぎ話でも読んだかな。覚えてはいないんだけどね」
はぐらかされたような気がする。

月の話なんてちよっとロマンチックだと思ったのに、どうも期待通りの展開ではなかった。

しかし、ジェイドなりに何か会話のきっかけをと気を使ってくれたのかもしれない。

藍香は都合良く解釈しておくことにする。

「黒崎クン。少し待っていてくれるかい？」

そう言つてジェイドは部屋を出て、何分もしないうちに戻ってきたのだがその間藍香は余韻に浸つて呆けたままだった。

ジェイドは藍香の手からハンカチを取り、代わりに講師控室から持ってきた絆創膏を指先に巻きつける。

藍香は緊張のあまり固まって動けないでいたが、なんとか思考を取り戻した。

「ハンカチ……。汚してしまったから洗つて返します」

「いいから、いいから。それじゃ、頑張つてね」

やっぱり紳士的で格好良いなと考えているうちにジェイドが扉を出て行きそうな事に気付いて藍香は慌ててお礼を述べ頭を下げた。

彼は振り返らずに手を振り去って行く。

そんなキザと思えるような仕草も彼にかかれば映画のワンシーンのようだ。

またばーっと見つめてしまっていた藍香だったが我に帰り、書類を整理し始める。

生徒達がジエイドと挨拶を交わす声を廊下の向こうに聞きながら。

C r i m s o n F a n g : 2

今日はジエイドに出会わなかった。

彼が通りかかったならこのダンボールいっぱいの荷物を運ぶのも手伝ってくれたかもしれないが、そう何度も幸運に恵まれるはずもない。

藍香は両手がちぎれそうな思いをしながら階段を下り、やっとの事で外へと通ずる扉を開いた。

そこは表通りの喧騒を遠くに聞く暗い路地。

ゴミ置き場だけがあるビルとビルの隙間はまるで世の中から切り離された隙間のようだ。

藍香は箱いっぱい詰まったゴミの重さも忘れるくらい物悲しく寂しい気持ちになってしまった。

さつさとゴミを捨てて立ち去ろう。

今日はいつになく仕事が大引いてしまったけど、このゴミを捨てれば別に何事もなく帰れるのだと藍香は自分に言い聞かせた。

夜も更けた街の路地裏の申し訳程度の街灯が光と共に作り出した影の中で何かが動いた気がして藍香は身を堅くする。

犬か猫だろうか。

そつえば野犬に噛まれたとかいう事件が起こったのはこの限界だ。

普通なら逃げるところを藍香は確かめずにはおけない性格だった。もし野犬なら速やかに通報して捕獲してもらうべきだ。

奥まって影になったその場所に藍香は恐る恐るだが近付いてみた。想像と違う。

犬や猫の大きさではない。

もっと大きい影。

ちょうど人間くらいの。

というかそこにいたのは人間だった。

暗がりでは抱き合う男女。

今まさに男が女の首もとに口づけをしようというところだ。
ぼすっという重い音がなんとも間が抜けた感じで静けさをかき乱した。

藍香は慌てて立ち去ろうとして思わずダンボールを落としてしまったのだ。

後ろ姿の女の首筋から男が顔を上げる。
目が合った。

「き…君は…！」

藍香の声でさっきまで無抵抗だった女性が突然我に返ったように相手を振り解いて走り去って行くが男は追おうとはしない。

「やつぱり。…架牙深君…いえ、リュウね」

藍香はその男を知っていた。

彼は名を架牙深龍介かがみりようすけという。

藍香が龍介と出会ったのは教育実習先の高校。

その龍介と身体を共有している吸血鬼がリュウで、藍香は彼らに助けられたのだ。

あれから、藍香は龍介のことを忘れられなかった。

また会いたいと思っていた。

会ったらお礼を言わなければならないと思っていた。

けれど思いがけない再会にそんな考えは吹き飛んでしまっていた。
それにやっと会えたその人は以前会った時と随分印象が違ってしまっている。

服装はTシャツにシャツを羽織った高校生の私服に珍しくないスタイルながらハードなスタッズが付いていたり、ジーンズに付いたチェーンはやたら高価そうだったり。

爪は黒く塗ってあるし。

耳にはピアスが両耳で五つ。

他にもシルバーや革のアクセサリーが首にも手首にも指にも。

「誰だ、てめえ？」

リュウは不機嫌さを露わにして言う。

「覚えてないの？こっちは切り裂きジャックと間違われたっていうのに」

「…ああ。あん時のデカくてギヤアギヤアうるせえ魔女か」

藍香はムツとしつつも堪えた。

それより気になることがあったからだ。

「血を吸ってたの？いつもこんな事してるの？」

それが吸血鬼の食事方法なのだと頭でわかってはいても、藍香にはそれが恐ろしい行為に思えてしまう。

「あー相変わらずうるせえ。てめえのせいで一口も飲んでねえよ」

リュウは気だるげに言った。

完全には答えになってはいなかったが。

食事を邪魔されて気が立っているが血が足りないせいで怒るのもめんどろになっている。

しかしそんな状況など藍香の知ったことではない。

「まさか…人が噛まれた事件、犯人は野犬だって言われてるけど君

の仕業!？」

「本気で言ってるのか? 人に気付かれるなんてドジふむかよ。さっきの女だって今頃オレのこと忘れてる。バカな人狼と一緒にすんناよ」

「人狼? 今、人狼って言った? 野犬じゃなくて人狼?」

「てめえには関係ねえ事だ」

肝心な部分で心底面倒くさそうなりユウに藍香はいい加減腹が立つてきた。

「…君じゃ話にならない。架牙深君に代わって」

「ハッ、無理だね。この体は夜はオレのだからな。それにな、命が惜しいなら何も聞かない方がいいぜ」

「何か起こってるならここにいる時点でもう十分危険よ。教えて! じゃないと何に気を付ければいいのかすらわからない!」

「…なら教えてやる。満月にここらで暴れてやがった人狼、ワーウルフ近くに潜んでやがるぜ。野犬騒ぎで済んでるうちがいいが。次の満月もうすぐだ。まあ、せいぜい気を付けろよ」

リユウは唇の端をわずかに持ち上げた。
面白がっているのだ。

また人狼は現れるだろう。

果たしてそれを知ったところで藍香自身に身を守る術があるとは思えない。

魔女の家系とはいえ生まれてこの方人間と変わらない生活を送ってきた藍香が強力な魔術など使えるはずもない事はすでにリユウも知っている。

知っていて全く助ける気はないという態度に藍香は腹が立った。

「もうひとつ教えといてやるよ」

「何よ!？」

返事は自然と喧嘩腰になる。

「あれ、終電だぜ」

「え!？」

藍香が肩に掛けたバッグを見てこれから帰るつもりだとわかったのだろう。

表通りのその向こうに近付いてくる電車のライトが見える。

駅はすぐ目の前で、走ればまだ間に合うかもしれない。

「もうっ何なのよあいつっ!」

心の声が口に出てしまっている事に気付く余裕もないまま藍香は駅に向かって全力で駆け出していた。

「今度は、人狼？」

嫌な感じの正体はそれだろうか。

生ぬるい街の風に薄ら寒い気配を感じたような気がして、藍香は背筋をふるわせたのだった。

自習室には空き時間を利用しようと授業のない生徒が入れ替わりでやって来る。

自習中にも時間の空いた講師に質問できるサポート体制がこの予備校の売りの一つだ。

藍香は授業を受け持つてはいないが、自習室で生徒達の勉強を見るという仕事を任されることがしばしばあった

主に他の講師の手が空かないときだけではあったが。

夕刻になりたまたまその自習室勤務に当たって雑用から解放されたところだ。

藍香は先日の事が気になりつつも仕事を放り出すわけにもいかず、生徒の質問に答えていたのだが…

やはり気になって仕方がない。

満月に人狼は現れるという。

普段はいつたい何処にひそんでいるというのか。

もし人狼に出くわしたらどうすればいいのか。

それ以前に結局リユウにお礼も言えていない。

連絡先くらい聞いておけば良かった。

ただし素直に教えてくれるとは思えないけれど。

だったら聞いて腹が立つより聞かない方がマシかもしれない。

答えのない考えが昨夜からずっと藍香の頭をぐるぐるとめぐっていた。

「先生？」

「え！？何？」

「先生の言ったやり方、ちがくないっすか？」

「え！？…ほんとだ…ゴメン」

「先生どうかしたんですか？」

「先生おなかでも痛いの？」

どこか上の空の藍香を周りの生徒達まで心配しだす始末。

「えっ…と…じ、実はそうなの！」

この際腹痛ということにさせてもらおう。
藍香は自習室を飛び出した。

じつとしていられず部屋を出た藍香だったが目的があるわけでもなく。

さすがに仕事が終わるまでは勝手に外に出るわけにもいかないと思っ直した。

気持ち落ち着いたら自習室に戻ろう。

そう思ってたことなく、教室のドアの丸いガラス部分から中を覗き込んだ時だ。

ドキリと心臓が飛び出そうになる。

一番後ろの席で頬杖を着いているやる気のなさそうな生徒。

昨日とは違いアクセサリー類はなく、最初に出会った時と同じ黒縁眼鏡をかけた真面目そうな出で立ちの　しかし目つきの悪さは

龍介というよりはリュウの方だ。

「それじゃあ誰かに次の文の英訳を書いてもらおうか」

ジェイドは教科書の文章を読み上げて、それから教室を見渡した。

「君は新顔だね。どうだい？わかるかな？」

指名されたリュウがそれはそれは鬱陶しそうにジェイドを見る。

「やはり少し難しいかな？他に誰か…」

リュウがおもむろに立ち上がったのでジェイドは言葉を切った。
にこりと微笑んでチョークを差し出す。

「見下ろしてんじゃねえ」

それなのにリュウがそんな事を言うものだからジェイドは心外そうに目をぱちくりさせた。

見下ろすなと言われても十センチ以上も身長差があるのだから視線はジェイドの方が上。

仕方がないことだ。

一瞬教室に緊張が走ったが、講師という立場上か子供の言うことと歯牙にもかけていないのか彼は口元に笑みを絶やさずにいる。

引ったくるようにチョークを受け取り、リュウは黒板に乱暴に英文を書き付けた。

「うん。間違っではないないね。けれど解答としては不適切だと言わなければならぬ。スラングを使っでは受験で点数はもらえないからね」

リュウの顔には“ ああん？めんどくせえなあ ”と書いてあった。
面倒だが言われっぱなしではよけいに腹が立つ。

リュウはもう一度英文を書きつけた。

さつきとは違い、流れるような美しい文字で。

美しい文章を。

「へえ、やればできるじゃないか。ちょっと古風な言い回しだけと合っているね。ありがとう。戻っていいよ」

けれどリュウは席に着こうとはしなかった。

「帰るぜ」

「え？何だつて？」

「気分悪いから早退するって言ったんだ」

「ちょっと待ちたまえ！」

「るせえよ」

制止には応じずドアが開けられる。

見た目に反してなんという態度なのかとそこにいた全員が思った
だろう。

ざわめきの中で扉は閉ざされた。

慌てたのは藍香の方だ。

隠れる場所なんてない。

かがみ込んで気配を消してみたところで意味なんてなく、まとも
に目が合った。

「んなとこで何してる？」

藍香はしーっと口元に人差し指を当てる。

ジェイドにまで見つかつては困るじゃないか。

「こっち来て」

彼女はリュウを無理やり引っ張ってその場から逃げ去った。

非常階段の踊り場で藍香はリュウを解放した。

そこはビルとビルの間の薄暗い場所で、つまりこの下にゴミ捨て場がある。

「何か用があるならさっさとええ。こっちはてめえのせいで血が足りてねえんだ」

どうやら気分が悪いのは本当のようだ。

血が足りないと貧血症状になるらしかった。

「なんで私のせいになるわけ？」

「昨日邪魔したろうが」

「はいはい、悪かったわね。それで、君なんで予備校にいるわけ？」

とりあえず適当に謝って話を進めようとする藍香。

「てめえに関係ねえ」

「人狼を探してるんでしょう?」

「解ってんなら聞くな」

リュウはポケットからタバコを取り出してくわえながら藍香以上に適当に言った。

しかし火をつけようとしたライターを藍香が奪い取る。

「タバコはダメよ。未成年でしょ?」

「ああ?オレが見た目通りの歳だと思ってるのか?」

「未成年じゃなくても、健康に良くない」

「吸血鬼に向かって健康だなんだと馬鹿じゃねえの?」

確かに不死身の吸血鬼には無用の心配かもしれないけれど。

いちいち人の上げ足を取るようなその態度。

もう受け流すのは限界だった。

「少しくらいまともに会話できないわけ!?見た目と違って大人だっというならレイン先生みたいに大人らしい振る舞いしてみなさいよ!」

「レイン?あいつ...いけ好かねえ」

リュウは彼を気に入らない理由でもあるのか、しかめっ面を作る。しかしただ単に引き合いに出されたのが面白くないようにも見えて、ジェイドの爪の垢でも煎じて飲めばいいのに、と藍香は内心でつぶやいた。

「レイン先生には適わないって、せめて男らしく認めたら？」

「んだと？オレのどこがあいつに負けてる？」

「性格、見た目、全部。レイン先生は紳士的だし背だつて高いし。見下ろすとか言つてひがんでたのは誰だっけ？」

「オレは本当はあんな奴に見下ろされるほどちっこくねえ！龍介こいつの体が悪いんだ」

身長のことを言われてよほど腹が立ったのか、リュウが声を荒げた。

だが次の瞬間には屈み込んでしまう。
貧血気味なのに興奮したため目眩を起こしたのだ。

「ちよつと…大丈夫？」

思わず藍香が心配するが程なくしてリュウは立ち上がった。
非常階段を下へ向かう。

もう言い合うのも面倒だと言わんばかりだ。
結局人狼について聞けずじまい。

本当に体調が悪いなら藍香に止めようもない。

「あいつ、あんま関わるな」

ただ、最後に残した眼差しは真剣さを帯びて真っ直ぐで、声は夜の闇に溶けるくらい静かだったから、藍香の心にとさら深く残った。

Crimson Fang:4

朝っぱらから重い荷物運びの雑用を言いつけられた藍香は気分まで重く、内心深いため息をついた。

ここの講師は男性が多い。

それなのに何故か弱い女性にばかり荷物を運ばせるのか。

平均的な女性より身長もあるし、か弱くは見えないという理由はこの際気付かないふりをする藍香だったが、先日自習室をほったらかして上司から大目玉をくらったばかりである。

クビになりたくなければ今は文句を言わず与えられた仕事に専念するしかなさそうだ。

講師控室と資料室を何往復かしているうちに廊下はだんだんときやかになってくる。

生徒達が増えてくる時間だ。

藍香はその中に見知った顔を見つける。

歩いてくるのを見るだけで昨日との雰囲気の違いは明らかだ。

「架牙深…君？」

「お久しぶりです」

穏やかな笑みが浮かぶ。

藍香はリュウではなく龍介に会えたことに素直に嬉しくなった。

「良かった、やっと会えた！前に助けてもらったお礼もまだ言えてなかったから」

「いえ。あの時は犯人だと疑ってすみませんでした。あの…それ、手伝いましょうか？」

やはり彼はリュウとは違う。

リュウと話すと売り言葉に買い言葉になるが、龍介にならレインに負けているとか言ったりしない。

「人狼を探してるのよね？」

資料室に入った所で、誰にも聞かれてはいないだろうけど藍香は念のため声をひそめる。

「見つけてどうするつもり？戦うの？」

「相手の出方次第ですが、むやみに傷つけはしません。安心してください」

「危険なことにかわりない。なのに君が切り裂きジャックや人狼を追うのは何故？山城って刑事さんに会ったけど君自身は警察官ってわけでもなさそうだし」

「仕事ですから。ある筋からの依頼でね。闇に住む生き物と人間との共存のため。秩序を乱す者は止めなければならぬ」

龍介が浮かべる笑みが自嘲めいたものに変わった事を藍香は気付いただろうか。

「危険な相手に不死身の吸血鬼はうつてつけでしょう？警察と同じ犯人を追う場合も、警察が依頼者の場合もありますから顔見知りにもなります」

正確には、榊河に來た依頼であり、龍介自身はいわば雇われの身

だ。

しかし榊河の名に関しては藍香に明かすことはできない。
藍香が次の言葉を選ぶまでに少しの間があった。

「誰が人狼なのかはもうわかってるの？」

「…これ以上関わらない方がいいと思います」

帰ってきたのはやんわりとした拒絶だった。

「危険なことに巻き込みたくありません。後は任せておけばいいんです。あなたは暗闇の世界で生きる必要はないんですから」

人間でいたいなら関わり合ってはいけないのだと彼は言っているのだ。

相変わらず笑みを浮かべる龍介の瞳の奥にはどこか哀しげで寂しげな色がある。

前もそうだった。

この瞳を見てしまったから、気にならずにはいられなくなったのだ。

リュウのように威圧感はないが、それ以上は何も聞けなくなる。
龍介がリュウよりももっと遠い存在のように思えて、藍香は立ち去る彼にかける言葉が浮かばなかった。

授業が終わった教室は束の間の開放感に包まれる。

「ラーメン食い行こうぜー」

「おー行く行くー」

「じん 迅も行くだろ？」

言い出した男子生徒は何人かに声をかけ、参考書をバッグに詰めていた望月もちつきじん迅にも声をかけた。

「いや、俺はいいわ」

迅はちよつと申し訳なさそうな笑みを作る。

「最近付き合い悪いぞ」

「ゴメンな。じゃ」

冗談めかした不満に迅はあっさりとそう答え教室を後にした。
街はすっかり夕闇に沈んでいる。

とはいえまだまだ人々が眠る時間でもない。

普通なら友人達と少しくらい息抜きをしたいと思う。

受験生にだってたまにそういう時間は必要だ。

けれど誘いを断ったのは体調に違和感を感じていたからだ。

迅は根っからのスポーツ少年である。

去年までサッカーをやっていて体力には底なしの自信があった。

けれど体の奥が熱いのは風邪でも引いて熱があるのだろうか。

実はこういう感じは初めてじゃない。

ひと月ほど前だったか。

予備校に通い始めた頃。

その時は寝込んでひどい悪夢を見た気がする。

そこまで悪化しないうちにさっさと帰って休もう。

迅は胸の奥に沸き上がる不安とは別の何かに必死で気づかない振りをしながら駅へと急いだ。

駅のホームへとたどり着き、迅は振り返った。

何かに見られているような気がしたのだ。

それも何か恐ろしいものに。

どうにも背筋がゾクゾクする。

しかし電車を待つ人々の中に同じ予備校の生徒らしき男女が何人かいるのを見つけただけで、他に何もおかしいところはない。

背筋のゾクゾク感はいよいよ本気で風邪かもしれないため息をつく。迅。

その後を追ってリュウはさりげなく駅のホームを移動した。

「あいつが臭えのは確かだが、人間の血の匂いが濃すぎるぜ」

呟いたのは身の内の存在にだ。

今は何という事はない普通の少年だが、迅が人狼である可能性は非常に高い。

ただ、それに本人すら気付いていないのが問題だ。

無意識に人狼と化すのか。

とはいえ果たしてこんな奴が満月に人狼の血を目覚めさせ人間を襲うことなどできるのかとリュウは思う。

完全に彼が人狼だと断定できているならともかく、基本的に、彼が人間であるうちは手を出すことは出来ない。

次の満月、それが運命の分かれ道であると知っているかのように月はその輝きを強めている。

その事に迅自身は気付く由もなかった。

Crimson Fang:5

非常階段の踊り場で龍介はタバコを取り出した。

実を言えばヘビースモーカーなのはリュウよりも龍介の方だ。授業の合間にまでこうしてタバコに火を付けている。

龍介はゆっくりと煙を吐き出した。

目で追えばビルに挟まれた細い空からわずかに降り注ぐ光が眩しい。

彼はリュウほど日の光を疎ましくは思っていない。

確かに直射日光に長く当たれば体力の消耗は激しくなる。

しかし灰になったりはしない。

それは龍介が普通の吸血鬼とは少しばかり違うことを示していた。そうしてタバコが半分ほどになった頃だ。

「君はこんな所で何をしているのかな？」

振り返ると笑みを浮かべてジエイドが立っていた。

足音にも扉の開く気配にも気付かなかった。

夜よりも感覚が鈍るとはいえ吸血鬼のそれは人間よりもはるかに鋭い。

それなのにだ。

血晶剤ばかりに頼って生体から血を接種していないからだとリュウが頭の中で指摘する。

血晶剤とは血液から成分を取り出しカプセルに閉じこめた薬であり、龍介は定期的に接種しているのだが。

しかしやはり新鮮な血液には及ばないのが実状だ。

血が足りていなければ格段に感覚は鈍る。

さらに酷くなればこんな風に活動することだって出来なくなるかもしれない。

やはり全く人間の血を接種しないという選択肢などないということに龍介は気付いている。

気付いていて気付かないふりをしているだけだ。
だからリュウもしつこくは言わなかったけれど。

「僕にも一本くれるかい？」

タバコをくわえたままだったことを失念していた。

龍介は内心でリュウとジェイド両方に苦笑を返す。

喫煙を咎めるでもなくにこやかに近付いてくるジェイドの真意は読めない。

二人の間には緊張感が生まれていた。

「授業態度も喫煙も、君はちょうど大人や社会に反抗したい頃なのはわかるよ。しかし今は受験に向けて大切な時期だろう？好き勝手に振る舞うべきじゃない、と一応大人として進言しておくよ。火をもらえるかな？」

タバコを指に挟んで弄びながらジェイドは言う。

「…どうぞ」

龍介がライターを取り出すとジェイドは笑みを深くした。

「まあ僕は獲物さえ狩ればあとはどうでもいいんだけどね」

ジェイドがゆっくりと煙を吐き出しながら言うのと、タバコが龍介の唇からこぼれ落ちるのはほぼ同時。

腹部に視線をやれば深々とナイフが突き立っていた。

「……っ……あ……」

鉄の柵にしがみつくように何とか身体を支える。
足下には赤い雫がポタポタと音を立てて落ちた。

それを目にしたジェイドのにこやかな笑みは残忍さを帯びて。

冷たく暗い炎を宿した瞳で龍介に向かい懐から取り出したもう一本のナイフを構えた。

次に狙うのは心臓か。

普通のナイフなら致命傷になり得ない。

けれどこのナイフは違う。

銀製だ。

心臓を貫かれても無事だという保証はない。

「こんなところにレイン先生がいるのぉ？」

「絶対こっちに行ってたって」

「非常口から出てったって言うの？」

「わかんないけどぉ。でも、行ってみればわかるって！」

近付いてくる女子生徒達の声。

ジェイドが一瞬気を取られ、視線を戻した時には龍介の姿はそこになかった。

彼は追おうとはしない。

ことさらゆっくりと煙を吐き出し、どうせ逃れられはしないのだと嘲笑った。

ゴミ置き場は昼間でも薄暗い。

何かがガサゴソと音を立てていた。

数日前にリュウに出くわした場所だ。

今日はいるはずもないのだけど。

気になって覗き込めばゴミ袋を抱えた藍香を見つけて野良猫が猛ダッシュで逃げて行った。

「よいしょつ…と」

ゴミ袋を二つ大きなゴミ箱に放り込んでパンパンと手を払う。

満月はもう明日に迫っている。

龍介までが首を突っ込むなど言うがどうしたものかとため息をついた。

そこへ突然上から降ってきたものがあつたから、藍香は思わずぎやつと小さく悲鳴をもらした。

降ってきたのは人だ。

「架牙深君！？」

藍香が呼びかけても彼は膝を着いて着地した体勢のままうずくまっている。

この上は非常階段。

つまりそこから飛び降りたことになる。

しかし彼は飛び降りた事で怪我をしたわけではないらしい。

彼が自らの体から引き抜いたのは血に染まったナイフだった。

刃先から柄までが銀でできたそれは赤い糸を引いて地面に転がる。けれど血が止まらない。

傷がふさがらない。

龍介は血の気の薄い唇を噛み締めた。
まだ日中。

血が足りていない今の状態では銀製の武器による傷が癒せようはずもない。

ナイフに付いた血が灰になってさらさらと落ちるのを見て藍香は冷たい手に心臓を掴まれたような怖さを感じた。

龍介が人間ではないことを目の当たりにした恐怖ではなく不死身のはずの吸血鬼が傷を回復出来ない事態が起こっているのだという怖さだ。

自分が何とかしなければ。

助けなければ。

そればかりが藍香の思考を占めていた。

でも、どうすれば？

その答えに藍香は一つだけ思い当たった。

「しっかりと！今、血をあげる」

藍香はこともあろうにナイフを拾い上げると自らの指に刃を当てたのだ。

知らない、龍介はそう言おうとした。

人の血を飲む事に嫌悪を感じずにはいられない。

それなのにドクンと鼓動が跳ねる。

白い指先から流れ出した真っ赤な色から視線が放せなくなり、理性がかき乱される。

頭の中でリュウが何か叫んでいた。

やめておけと言っているのだ。

まるでいつもとは逆だ。

けれど、龍介は自らを御することができなかった。

惑わされているかのように引き寄せられ、温かな血を口に含んだ。

その瞬間衝撃に近い感覚に襲われる。

今まで味わったことのないくらい甘い血の味、血の匂い。

こんなに少しでは足りない。

もっと血が欲しい。

唇が指先から腕へと移動しても藍香はそれを受け入れた。

本当は怖かったけれど、これは輸血と同じ。

人助けなのだと自分に言い聞かせて。

龍介は衝動に任せて白い肌に牙を食い込ませかけ、しかし乱暴に身を離れた。

「余計なことすんな!!」

それはリュウの声だった。

「貧血だったんでしょ？血が足りないって。前みたいに血を飲めば怪我だって治るんじゃないの？」

「るせえ！消えろ!!」

藍香は返す言葉が浮かばないほど腹が立った。
消えろとはあんまりだ。

あんなにも勇気を振り絞って血をあげたのに。
リュウの血の色の瞳を睨み付けて思い切り拳をその頬に叩き込んだ。

「なによ！助けようとしたのに、そんな言い方…」

涙が出そうだが泣くのは嫌だった。

くるりと向きを変えてそこを後にする。

藍香が行ってしまったのを見てリュウはそのままビルの壁を背に

座り込んだ。

リュウが出てこれたのは龍介が吸血衝動に負けて意識を手放したから。

幸いここには太陽の光が届いていない。

でなければ昼の光の中で身体の主導権を得るのは彼には難しいことだ。

リュウは珍しく頭を抱えた。

平手ではなく拳をくらった頬はジンジンと痛んだがそれも無視して。

「魔女の血…」

それは吸血鬼にとって一度口にすれば忘れられない麻薬のようなもの。

ほんの少し口にただけなのにもう甘美な誘惑に捕らわれている。他の血を口に出来なくなったらおしまいだ。

彼女なしでは生きられなくなる。

そういう吸血鬼をリュウは過去に見た。

あれ以上飲めばおそらくそいつと同じになっていただろう。

あるいは、もう…。

「んなわけねえ。あいつはほとんど人間に近いんだからな」

それでもたった一口で傷を完全に癒すほどの魔力を持っていたのだけだ。

リュウは嫌な考えと焦りを無理矢理に頭から追い払った。

満月。

暗闇に魔力の満ちるその日は青空から爽やかに始まった。

悪いことなんてきつと起こらないだろうと、そう思わせるほどに
気持ちの良い日だ。

龍介は昨日の一件など無かったかのように授業を受けていたし、
その視線の先では迅も普通に授業を受けている。

いつもと何ら変わらぬ風景。

そのまま何事もなく一日が過ぎるかに思われた。

日常を打ち破りビル内に爆音が轟いたのは日が傾きかけた頃だ。

非常ベルが鳴り響く。

何が起こったのか理解する暇もないまま生徒も講師も半ばパニック
状態で建物の外へと向かった。

幸いにも二度目の爆発音は聞こえない。

どうやら爆発は物置になっている部屋からだったようで、負傷者
は出なかった。

いや、出なかったらしい、という情報が流れていた。

しかし、実際には外に避難した人々の中に見あたらぬ人物が数
名いることにすら人々は気付く余裕がない。

今はただ混乱の中、ビルを眺めるばかりだった。

「どうして開かないの!？」

藍香は扉の前に立ち尽くしていた。

一歩先はビルの外。

しかし扉は堅く閉ざされ、向こう側は遠い世界のように感じられる。

ガラスの扉は触れると静電気みたいな痛みがはしり、叫んでも向こう側には届かない。

声だけじゃない。

外からこちらを見ている人達はすぐ数メートルの距離で誰も藍香に気付かないのだ。

「いったいどうなってるのよお」

がつくりとうなだれる。

「どうやら僕らは閉じ込められてしまったようだね」

誰に問いかけたわけでもなかったが、答えが返って藍香は身をこわばらせた。

振り返り少しばかり肩の力を抜く。

ジェイドは困り果てたという表情ながら優しげな笑みを絶やさずいつの間にかそこにたたずんでいた。

ここに留まっても仕方がないから他に取り残されている生徒がいないか探してみようと促されて藍香はビル内を搜索する事にした。

ジェイドの半歩あとを歩く。

「静かすぎておかしいと思わないかい？」

自分達の他には誰もいない不気味な静けさ。

それに外の喧騒も、救急車やパトカーのサイレンの音も聞こえて

こない。

「そうですね。どうなっているんでしょう?」

「僕にもわからない。夢なら覚めてほしいね」

ジェイドは首をすくめて見せた。

扉は何か不思議な力で閉ざされている。

誰が何のために。

ジェイドには言えないが藍香には浮かんだ答えがあった。

それはおそらく今日が満月であることと人狼に関わっているのだと藍香は考える。

だったらここに自分たちを閉じ込めた者こそが人狼なのではないだろうか。

実は、ジェイドには近付くなどリュウに言われて藍香は彼を人狼と疑っていた。

けれどおそらくそれは間違いだ。

ジェイドは人狼らしき素振りを見せない。

その事に藍香は安心し気を許してしまっていた。

爆発のあった部屋の扉はひしゃげて外れている。

内部は資料が散乱していて、一部分が焦げた部屋から聞こえるのはスプリンクラーが水を降らせる音だけ。

それが不気味な静けさを強調する。

その静けさに足音が混ざり込んだのを龍介は聞き逃さなかった。

何かに怯えて逃げているような不規則な足音。

龍介はその足音の主が逃げ込んだらしい教室に気配を殺して近づいた。

教室の中の人物もまた息を潜め、我が身に降りかかった訳の分からない災難が早く過ぎ去ってくれることだけを祈っている。

教室の隅で膝を抱えて座り込んでいるのは龍介が探していた人物に他ならなかった。

扉を引き開ければ望月迅は弾かれたように顔を上げる。

「お…おまえ…」

リュウの行動によりたいがいの生徒からは近付きたくないやっかいな奴あつかいの龍介だったから迅も一瞬反応に困った。

どうしてここにいるのかという訝しみと、一人じゃなくて良かったという安堵感が迅の顔に同時に浮かんでいる。

「怪我はありませんか？」

「ないけど、なんで！…なんで窓も扉も開かないんだ…？他に誰もいないのだからおかしくないか？」

「それは…」

真実を告げるべきか、龍介は迷った。

自分自身が人狼であることを迅は知らないのだから何故閉じ込められているのかわかるはずもない。

説明したところで信じられないだろうし、パニックを起こして暴れられても困る。

「後で説明します。ひとまずここから出ましょう」

今や相手のテリトリーであるこの建物内に留まっていたは迅の身を危険にさらすことになりかねない。

たとえ人狼であっても人間として生きたいというなら 秩序を重んじるというなら 手を貸すのも仕事のうちだ。

龍介の聴覚が近付いてくる足音を捉える。

二人分の足音。

仲間がいたとは気付かなかった。

この部屋をやり過ごしてはくれないかと淡い期待を抱くも足音は扉の前でぴたりと止まった。

龍介は身構える。

扉が引かれ、現れたのは予想通りに長身のスーツ姿。

「おや、当たりだったな」

ジェイドは言う。

爆発を起こし、自分達だけをこの場に隔離したのは彼に違いなかった。

追い詰めて直接手を下す、そのために。

龍介はジェイドから視線をはずさないまま、左手をズボンの背に挟んだ銃へと伸ばす。

「架牙深君！それに、望月君？」

しかし予想外の声を聞いて龍介は硬直したように動きを止めた。まさかもう一人は黒崎藍香だったとは。

彼女までがここに残っているとは。

しかも藍香はまだジェイドの危険性に気付いていない。

「搜したよ、君達」

ジェイドは残忍な笑みをその面^{おもて}に張り付けて言った。
今の状況を見れば藍香は人質のようなものだ。
下手に動けば危険が及ぶ。

ジェイドと共に来るように促されれば従う他ない。
ピリピリとした空気に藍香はいやな予感を感じ始めていた。

爆発の起こった部屋の前でジェイドは足を止めた。
すでにスプリンクラーは水を降らせるのを止めて静まり返っている。

だからジェイドが指を鳴らす音がやたらと大きく響いた。

「さて、狩りをはじめようか」

「まさか」

やはりジェイドが人狼なのかと藍香は問おうとしたのだが、異様な空気を感じて言葉はそこで途切れた。

室内なのに風が吹き荒れ始める。

何処からともなく。

いや、それは床から拭き上がっていた。

積もった書類が舞い上がる。

隠れていた床には堅いもので刻まれた奇妙な模様があった。

円と奇妙な記号とそれらを繋ぐ線。

それが風を生み出している。

ジェイドが懷から取り出した物があった。

赤黒い染みの付いたハンカチが三枚。

一枚は藍香の指先を拭ったものだ。

ハンカチは風の渦巻く模様の中心へと吸い寄せられて行く。

「三匹もいるとは予想外だったが、まとめて始末してやろう」

“僕の可愛い守護天使、おいで” ジェイドはそう付け加えた。

それは英語だったから藍香にははっきりとはわからなかったけれど、残忍な響きは感じられたから背筋が寒くなる。

床に描かれた円と線と記号が光を帯び始めた。

血の跡が残る三枚のハンカチは塵と化し、大気が大きく震える。

ゆっくりと何かの頭が、続いて胴体、鋭い爪の生えた手足が現れた。

前進を鎧のような殻が覆い、背には白く輝く翼。

守護天使とジェイドは言った。

見ようによつてはそれは天使に見えるかもしれない。

しかし神の使いというにはどこかいびつな形の生き物に慈悲深き心など微塵も感じられない。

口とおぼしき部分がゆっくりと開いた。

甲高い獣の雄叫びを上げたその牙の奥に青い炎が燃えている。

「うわああああ!!」

それを見た瞬間に、それまで凍り付いたようにそこに立っていた迅が恐怖にかられ悲鳴を上げ腰が抜けたようにその場にへたり込んだ。

彼の心に刻まれた得体の知れない恐怖がそうさせていた。

思い出せそうで思い出せない。

それが余計に恐怖を増幅させている。

迅でなくともこの守護天使とやらと対峙すれば不気味さを感じずにはいられないだろうが。

龍介が銃を構えた瞬間、迅に向かい青い炎は放たれた。

龍介が放った弾丸が炎を正確に捉える。

それは触れ合った瞬間に反発し合ったかのように光と爆風を生む。迅はその隙になんとか立ち上がりジエイドとは逆方向に走り出す。さらに続いた銃声は爆発音にかき消されたが、突如として辺りに白い煙が立ちこめた。

それは吹き出したといってもいい勢いで。

爆風に煽られて白い煙は辺りに広がり、あちらとこちらを隔てる煙幕となる。

龍介が続けざまに打ち抜いたのは廊下の隅に設置されていた消火器だった。

煙は急速に広がって迫って来る。

「今のうちに！」

龍介は藍香の手を掴み、煙に追われるようにその場を後にした。

Crimson Fang:7

ひとまず廊下に立ち込める白い煙を避けて、藍香と龍介は手近な部屋へと逃げ込んだ。

迅はもつと先へと走って行ってしまったらしい。

全力で駆けて藍香は息が上がっているのに龍介は息一つ乱さず当たりを冷静に伺っている。

まさか藍香までを狙ってくるとは思わなかった。

無事で良かったと思いつつも龍介は息を整えて顔を上げた藍香から視線をそらせる。

本当はもう目の前に現れるつもりはなかった。

自分が行った吸血行為に、彼女はいつたいどんな顔をするのだろう。

人外の者に向けられる嫌悪に満ちた眼差しが怖くて、真っ直ぐに藍香を見ることなど出来はしなかった。

しかし、藍香本人はリュウの言動に腹を立てこそすれ、龍介に対して嫌悪感など抱いてはいない。

それは魔女の血筋であるからというよりは、彼女の性格上の反応である。

「架牙深君、昨日の怪我は！？平気なの？」

「え…ええ、はい…まあ…」

藍香が突然駆け寄って、シャツを捲り上げるものだから龍介はしどろもどろになった。

「良かった治ってる。少ししか血を飲まなかったから、効かなかったんじゃないかと思ってたの。」

藍香はひとまず安堵のため息をつき、そしてまた気を引き締めた。

「レイン先生は何者？あの獣みたいなのは何なの？」

「彼はあれを守護天使と呼んでいました。ジェイド・レインはおそらくエクソシストです」

「エクソシストってあの映画なんかに出てくる？」

それは悪魔を払う異国の退魔師のことで、多くの場合正義の味方だ。

「イメージと違うわね。それじゃあ人狼は…」

「望月迅です」

「レイン先生も人狼を捜してたってことね？でも味方ってわけじゃ無さそうね」

「彼らにとって人間以外は忌むべき存在です。とはいえここまで強行な手段に出るとは…」

迂闊だったと龍介は思う。

「彼は人狼を閉じこめるための魔法陣をこの建物に仕掛けたんです。そして爆発騒ぎを起こした。人間だけがこの建物から逃げ出すように」

「レイン先生は私達の誰か、もしくは三人ともが人狼だと当たりを

つけてたってわけね。だからここに閉じ込めて…」

「なぶり殺すつもり、なんでしょうね」

龍介がさらりと口にした言葉は穏やかでない。

「行こう！先に望月君を見つけないと！」

藍香は自分の身の危険よりも迅の事が気かりだった。

レインは手段を選ばないから有無をいわず殺そうとするかもしれない。

魔物が人間を襲うには理由があるかもしれないこと、何かに惑わされている可能性があることを藍香は以前関わった事件で学んだ。

だから人狼が凶悪な怪物だと、決めつけることはできない。

逆に迅がレインを傷つけてしまう事も避けたい。

最悪の事態になる前に止めなければ。

「あつ！待ってください！」

危険を省みない藍香を龍介は慌てて追いかける。

先に人狼を見つけないければならないのは確かだ。

無闇に命を奪うことは秩序を守ることとは程遠い。

藍香を一人放っておく事も、迅を放っておくことも出来ないのは確かだった。

「架牙深君、私から離れないでね！」

「わ…わかりました」

逆に言われてしまい龍介は反射的にそう返していた。

リュウがため息をつくのが聞こえる。

薄く煙の残る廊下は不気味なほどに静まり返り、何かの気配は感じられない。

ジェイドがすぐに追ってこないのはダメージを負ったからではないだろう。

ゆっくりと追いつめる。

そうして恐怖を煽っているのだ。

辺りを警戒しながら迅が走り去った先に向かう二人。

きっと何がなんだかわからなくて怯えているはず。

人間には罪を償うチャンスが与えられるのに、人間でないなら生きてはいけないなんて、そんなのはありえない。

藍香の心の奥には怒りにも似た憤りが生まれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0555k/>

青天の破片外伝

2011年10月9日03時25分発行